

# 序 文

校長 田 中 瑩 一

## 本質を語れ、そして柔軟に語れ

学校の「研究発表会」には教員各自の自己研鑽のほか、教員相互の意思統一、さらには指導要領の趣旨普及といった教育行政的な機能も託されているわけで、新しいことを見出すというよりは、すでにわかっていることを当面の素材で確認することを目的として行われるといった場合もあってよいだろう。そういう発表会に出席してみると、授業の展開や記述（指導案や実践記録）にどこかでみたことのある型が引用されており、個々の実践がどのように美しくその型を実現しえたかを発表の眼目としているかのように見えることがある。が、「研究」を任務としている附属学校の「発表」はそうであってはならないだろう。流動して止まない授業の事実を研究対象とするためには、対象を切り取る適切な術語を用意し、記述の型を工夫する必要があることは言うまでもないが、それを借りもので済ませようとすると墮落する。

三年前、平成元年版の学習指導要領（平成五年度より実施分）を文部省の主任視学官としてまとめ終えられたばかりの瀬戸真教授を本校にお招きして、研究のありかたについて助言を受けたことがあった。瀬戸氏は、指導要領の内容についてはほとんど触れず、指導要領を生み出すためにどのような視野での議論が、どのような手続きで進められたか、いわば指導要領誕生の本質的裏話を語られた。それは大きく言うと、地球の現状をどう見るかということであり、人類の文化の将来をどう予測するかということであった。新しい指導要領をどのように実施するかというようなことはもうよい、実験校で研究済みだ、それよりも、この指導要領に盛り込めなかった、将来かくあるべき教育の問題についての提言が欲しい、といった瀬戸氏の期待が私たちを刺激した。

## 実践から語れ、そして理論に至れ

教育実践論文の一つの型として、はじめに著名な教育理論家の理論を引用し（場合によっては学習指導要領の一節を引用し）以下はそれに添う、あるいはそれを

実証するものであるとして自己の実践を紹介するといった書き方がとられることがある。そういう書き方でも、優れた論文はかならず古い理論を越え、新しい理論への萌芽を語っている。我々実践に生きるものは、実践を語ることを通して、理論家に新しい理論を要求する権利があるし、また義務もあろう。新しい実践が新しい理論を呼び覚まし、新しい理論が新しい実践を切り開く、こういった環境で仕事をしたいものだ。

このことにかかわって、私は、自分の専攻に取り込もうとしていた民話調査の分野で取り返しのつかない失敗を犯した経験がある。調査をはじめた昭和46年ごろ、私の関心は「昔話」の収録にあった。私の周辺の調査者の大部分もそうであったし、これが日本民俗学の正道と考えられていた。しかし、すでにそのころ先端的な研究者は「世間話」をも含めた広い見地から民話研究を再構築しようとしていたことを後に知った。私がフィールドとしていた島根では、当時まだ豊かな「昔話」の語り手に会うことができたので気付くのが遅れたが、すでに他地域では「昔話」の語り手が少なくなり、調査に行っても、聞けるのは主として「世間話」という状況になっていた。そういう民話伝承の実態を前にして、調査者たちは「世間話」をこそ研究対象にする必要性に目覚め、そのための研究理論を求めていたのであった。やがて島根でも「昔話」の語り手が見付からない時代がやってきた。聞けるのは主として「世間話」という状況になってきた。その頃になって気が付くと世間話研究の成果もぼつぼつあらわれはじめていた。しかし私の手元にある資料は「昔話」に偏っていた。昭和46年ごろの「昔話」伝承がどのような「世間話」伝承と共存していたか——今、切にそれを知りたい。しかし、当時「世間話」収録の必要性を自覚する理論を持っていなかったばかりに、私の収録資料からはそれが完全にもれている。実践の中から理論を求めようとしなかったための、取り返しのつかない失敗である。

本号に収めた教育研究の論文は上記のような意味で新しい理論を希求する提言を含んでいるものと確信するが、忌憚ないご批判をお願いする次第である。